

World Watching 189

ワールド・ウォッチング



樋口 嘉章

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
執行役員



はじめに

2015年9月末に、PIANC（国際航路協会）のMarCom（海港委員会）がオスロで開催された際、オスロ港を訪問・視察する機会があったので、同港の状況について報告する。



ノルウェー王国の概況

ノルウェー王国はスカンジナビア半島の西側に位置し、人口は516万人（2015年1月1日）、面積は38.6万km²（日本より少し大きい）、GDPは5,002億US\$（2013年、神奈川県とほぼ同じ）、一人当たりGDPは97千\$である。同国は1969年に北海で石油・ガスが発見されたことにより、一躍、有数の金持ち国となった。石油やガスを産する国の国民が、必ずしも豊かになっているとはいえない中、同国では資源を活かして経済成長・国民の豊かさを実現していることは特筆に値する。

国民の所得は高いが、付加価値税は25%と高く（食料品は軽減税率15%）、物価も高い。例えば、2014年度版のビッグマック指数が813円で、世界一となっている。（日本の310円（世界42位）と比べると2倍以上）一方、教育費や入院や出産における医療費は事実上無料であり、高所得・高負担・高福祉の国となっている。また、先進国でありながら、人口は着実に増加しており、特にオスロ都市圏では2030年までに30%増（80万人増）が見込まれている。



ノルウェー首都の港 オスロ港



港湾管理の枠組み

ノルウェーは全国が19の県に分かれており、その下に403の自治体がある。首都であるオスロ市は一市で県となっている。オスロ港を管理するオスロ港湾局（Oslo Havn KF）はオスロ市管轄の事業体であり、その理事会は市の議員など7名の関係者で構成されている。オスロ港湾局の職員数は123人で、港湾に対して物流の面から責任を持っている。一方、オスロ市で現在進められているウォーターフロント開発「フィヨルドシティ・プロジェクト」（後述）については、オスロ市のウォーターフロント計画局が、オスロ港湾局と調整しつつ、進めている。



オスロ港の概要

オスロ港はオスロ・フィヨルドの最北部・最奥部に位置し、入港する船舶はオスロ・フィヨルドの長いアクセス航路（約90km）を航行してくる必要があるが、水域は静穏で外郭防波堤の必要はない。

オスロ港の取扱貨物量（2013年）は581万トン、うち226万トンが雑貨（うち新車輸入が57,000台）、リキッド・バルクが210万トン、ドライ・バルクが146万トンとなっている。コンテナ取扱量は202千TEUで、ロッテルダム港・ハンブルグ港などからの近海航路が週に9便寄港している。また、コペンハーゲン（デンマーク）、フレゼレグスハウン（デンマーク）、キール（ドイツ）との間で、国際フェリー航路が毎日運航されており、クルーズ船旅客と合わせて年間266万人の乗降旅客がある。

オスロ港では1982年に市街地に隣接したアーケル造船所が廃止となって、その跡地の再開発アーケル・ブリッジが進められ、商業・住居機

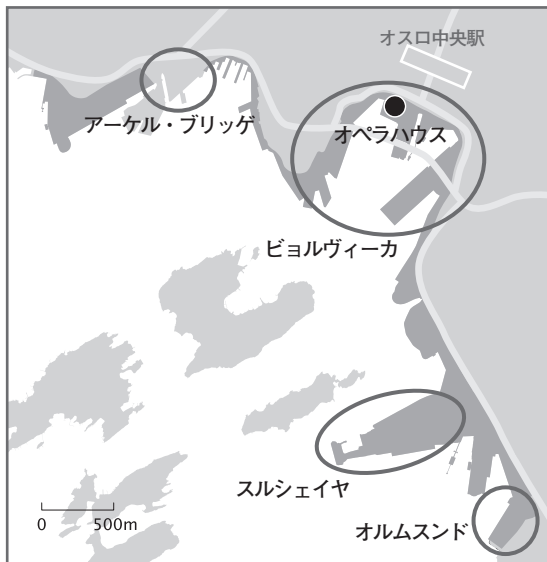


図1 オスロ港の平面図

能が整備された。その後、2000年1月にオスロ市議会で、港湾エリアの再開発「フィヨルドシティ・プロジェクト」が決議され、ウォーターフロント開発が順次進められることとなった。

例えば、オスロ中央駅の海側 Bjørnøyen 地区 (図1) では、2008年にオペラハウスが完成している。この建物は、エジプトのアレクサンドリア図書館を設計したノルウェーの建築家スノヘッタが設計した。屋上まで斜面を歩いて登り、港の眺望を楽しめるようになっている (写真1)。また、2010年には Bjørnøyen 地区前面水域に沈埋工法の Bjørnøyen トンネルが完成し、市街地の道路交通負荷を低減している。この他にもムンク美術館・ステネルセン美術館などが入る新たな文化センターを建設する計画も進められている。

一方、オスロ港湾局では「オスロ・ポート・プラン2013-2030」に基づいてオスロ港の機能強化に取り組んでいる。この計画では、以下の6つの目標が掲げられている。

- ①海運の活性化
- ②効率的かつうまく運営された港
- ③5割増の貨物量
(コンテナ貨物については年間45万TEU)
- ④4割増の旅客
- ⑤環境にやさしい港と海運
- ⑥オスロの魅力への貢献



オスロ港のコンテナターミナル

外資コンテナ貨物については、2015年9月末現在、スルシェイヤ (Sjursøya) ・ターミナルとオルムスンド (Ormsund) ・ターミナルで取り扱われている。増大するコンテナ物流需要に対応するとともに、コンテナターミナルの効率的な運営を図っていく観点から、スルシェイヤ・ターミナルについ



写真1 オペラハウス全景 ©Bjørn Erik Pedersen



写真2 スルシェイヤ・ターミナルの工事状況
2015年9月筆者撮影

て、オスロ港湾局とトルコのターミナル・オペレーターであるイル・ポート (Yil port) との間で20年の期間 (10年間の延伸条項付) でコンセッション契約が締結された。この契約では、岸壁だけでなくガントリークレーンなどの上物施設もオスロ港湾局の所有となっている。オスロ港側の説明によれば、万一、イル・ポートが撤退することになってもその影響を最小限に抑えるためとのことであった。2015年2月初めからイル・ポートによる運用が始まっている。同ターミナルでは、2015年末にオスロ港でのコンテナ取り扱いをスルシェイヤ・ターミナルで集約するべく、水深-12m岸壁を360mから665mに延伸する工事、ヤードの舗装工事、ガントリークレーン (2基→4基)、RTGなど荷役システムの増強などが段階的に進められており、整備が完了すると、年間45万TEUの取り扱い能力になる見込みである (写真2)。



おわりに

一国の首都としては、オスロ市は小さな街であり、オスロ港も貨物量などから見れば、小さな港である。しかし、貨物取扱施設を集約し、また市民の憩いの空間をも形成すべく、活発な建設投資が進められており、整備が一段落すれば、オスロ市の顔となるようなさらに洗練されたウォーターフロントが形成されることが期待される。

[参考] <http://www.oslohavn.no/en/>